二つの『会津百人一首』について（八重講座補遺）

吉海直人

一

知名度の高い百人一首は、それ故に多くの模倣作品（パロディ）を生み出している。その一つが、いわゆる「異種百人一首」といわれている作品群である。ちょっと調べただけでも、千に及ぶ「異種百人一首」が作成されている。これまで百人一首研究のついでに、目に付いたものは収集してきたのだが、直接研究に用いることはあまりないので、そのまま放置されているものがほとんどであった。

久しぶりに書架を整理していて、そこに『会津百人一首』という書名の本があることに気づいた。そこですぐに手に取ってみたが、その本をいつどこで求めたのか、まったく記憶に残っていない。おそらく何かのついでに購入して、書架に放置したまま何年も（何十年も）眠っていたのだろう。そのため八重の伝記を書いた折には、不覚にもその本の存在にはまったく気づきもしなかった。

二

ひょっとして新島八重の歌が入っているかもしれないとの淡い期待を抱き、早速本を開いてみた。すると案の定、やはり出ていた。本の著者は相田泰三と記されている。相田氏は会津の歴史研究家としては著名で、『保科正之公伝』・『松平容保公伝』・『会津士魂』などの立派な著書が知られている。私も「八重と天野謙吉」というコラムに引用した覚えがある。しかし『会津百人一首』はどこにも出てこない。それくらい軽い扱いの本のようである。

本の末尾にある「会津百人一首を発行して」という後書きを見ると、

故郷会津から毎夕新聞が来る。紙上の随筆「会津百人一首」を第一に読む。筆者の相田泰三先生は、会津の有名な歴史家であり、又私の恩師でもある。

と書かれていた。当初は福島の新聞に連載されていたもののようである（調べればわかるはず）。新聞掲載にしては一首あたりの文章が不規則なので、あるいは一首ずつではなく二首まとめての掲載というものもあったかもしれない。二六番など作者と歌だけで、略伝は一切書かれていない。

その連載終了後であろうか、相田氏の教え子であった石原利男氏が、所属する短歌結社「短歌合歓の会」に諮って、私家版での刊行を決断されたとある。石原氏は歯科医師だったようだが、第七回菊池寛賞を受賞した小説家でもあった。しかも、

私はここに先生には事後承諾という無礼を敢えて赦して頂き、遂に発行することにしてしまった。教え子の我がままであり、先生への甘えである。

と、相田氏の承諾をえずに出版に踏み切ったことが告白されていた。発行日は昭和四八年十二月二五日になっている。

もともと非売品の小部数出版であること、発行されたのが会津若松から遠く離れた香川県高松市だったこと、そして著者のあずかり知らぬ出版だったこともあり、会津若松でもこの本のことはほとんど知られていなかった可能性が高い。

三

さて、この本には一体どのような人の歌が撰ばれているのだろうか。「まえがき」によると、「私の読書中、心に留まったものを綴ったに過ぎない」と断られている。さすがに一番は会津藩主・保科正之公になっていた。それに合わせて百番も会津藩主・松平容保公である。では会津藩の歴史に沿って人選されているかと思いきや、八番に室町時代の連歌師・猪苗代兼載が入っている。これは郷土の偉人としてはずせなかったのだろう。

中心となっているのは、やはり幕末期のようである。中野タケ子・田中土佐・山川浩・神保修理・佐川官兵衛・照姫・飯沼貞吉など、知名度の高い会津人が並んでいる（「八重の桜」でお馴染みの面々）。また新城新蔵・秋山角弥といった京都会津会の会員も含まれている（山本覚馬は詠んだ歌が知られていないので落選）。

肝心の新島八重はというと、七三番にあった。ただし「山本八重子」となっている。やはり会津若松では「新島」ではなく「山本」なのであろう。興味深いのは、その少し後の七八番に川崎尚之助が入っていることである。『会津百人一首』に撰ばれているということは、尚之助を会津藩士と認めていることになる。ただし八重と夫婦であることには一切触れられていない。それは山本八重子の説明に、

後に同志社創立者新島襄の夫人となった八重子は、山本覚馬の妹である。

とあるからだろうか。採られている八重の歌は、もちろん「明日の夜は」である。

一方の川崎尚之助については、

はじめ正之助と称し、但馬国出石藩医の子であった。我藩に来てから藩祖正之公の諱をさけて尚之助と改めた。

以下、比較的長い説明が続いている。これは会津会会報二〇号からの引用とのことである。末尾は、

明治八年六月東京で没し、浅草区今戸町称福寺に葬った。享年三十九。子なく弔祭する者はない。辞世の歌

　　このごろは金のなる子のつな切れてぶらりとくらすとりごえの里

と結ばれている。そこで会津会会報に当たってみたところ、「このごろは」は狂歌として掲載されており、これを尚之助の辞世とするのはいささか無理かもしれない。

ここにあるように、従来まで尚之助は明治八年六月下旬に亡くなったとされていた。それが最近の研究成果によって、同年三月二十日に病院で死亡したことが明らかになった。

当時、尚之助は国際裁判の被告であり、斗南藩に迷惑をかけたくなかったので、八重とも離婚していた。そのため遺骨も郷里（会津や出石）に戻ることなく、ひっそりと東京のお寺に埋葬されたのであろう。八重と離婚していなければ、遺骨は当然妻である八重が引き取ったであろう。逆に「弔祭する者はない」と書かれていることから、既に離婚していたことがわかる。

欲をいえば、せめてこの本の中だけでも、八重と尚之助を並べて掲載してほしかった。そして略伝の中で二人が結婚していたことを記してほしかった。この記事を読む限り、二人が夫婦であることは意識されていなかったようだ。とはいえこの『会津百人一首』に、夫婦揃って選ばれているだけでも有難いと思わずにはいられない。この本の存在がもっと会津若松でも知られることを願っている。

四

と、ここまで書いておしまいにしようとした時、偶然もう一冊の『会津百人一首』を古書目録で発見した。同じ本がもう一冊あってもいいかなという軽い気持ちで注文したのだが、わずかな書誌情報の中に「毎夕叢書」とあるのが気になった。送られてきたものを見ると、なんと全く異なる装丁の『会津百人一首』であった。

この本によって新しくわかったことは、これが「毎夕新聞」に連載されたものだったことである。読者からの反響（評判）が良かったらしく、会津若松でもこれを本として出版したいという話が浮上したらしい。最終的には毎夕新聞社から「毎夕叢書Ⅰ」として、簡易製本された冊子が刊行されている。それもあって口絵には相田氏の顔写真が掲載されている。それに続いて毎夕新聞社社長秋田耕輝氏の序文が付されているが、その末尾は、

私は恩師相田先生が病床にあって残生をうちこんで完成された「会津百人一首」を世の心豊かな人々に捧げたい。

という決意表明になっている。発行日は昭和四九年五月一日である。これも「非売品」とあるので、やはり小部数の出版であろう。

両書を比較すると、発行は石原氏の方が早かった。しかし著者の了解なしというのが問題である。一方、毎夕版は著者の了解を得ているので、相田氏による以下のような「あとがき」が付いている。

和歌について私はズブの素人（シロウト）なので「会津百人一首」などは全く柄（ガラ）はずれであります。私は会津先人の約伝を調べているうちに丁度百人に達したので、その時ふと、此等の人の歌一首を求めれば、会津百人一首が出来ると思ったのが因縁で、毎夕紙に載せていただく光栄に浴したわけであります。

これが発表されると多くの方々から御手紙が来ました。そのうち「これは面白い」というのが大半、次には小倉百人一首は歌がさきに出ているのにこれはその人の伝記がさきで、歌が後にあるのは規格に反するというもの。次には、百人一首には私の祖

先の名が出ているが、その名の一字が誤っている、という御忠告などであった。
しかるところ、この九月二十二日であったが、阿部徳造さんがおいでになって、「先生が毎夕紙へ出された『会津百人一首』を私共同人で出版いたしたいと存じますので御承知ください」とのことであった。
その時私はビックリした。ビックリの内容は、私は恥ずかしいと思っていた会津百人一首が出版してくださるほどの価値があるのかということ。次には出版と聞いて心中何となくうれしくなったので、「御自由にしてください」といって原稿を申し上げたのである。
四・五日たって阿部さんが再びおいでになって、「あれは毎夕紙へ投稿されたものだから、秋田社長と相談の結果、毎夕社で出版することになった」とのお話。
かくして、毎夕社出版第一号として世に出ることになったことは私としては身に余る光栄、阿部さん、秋田社長はじめ関係の諸先生に対し心から御礼申し上げる次第でご座います。
相田泰三
これを読んでわかったことがある。石原氏の本ではまず和歌が掲げられていたが、あれは新しいレイアウトであって、当初は伝記の後に歌を添えるという体裁だったということである。また推測に過ぎないが、連載は昭和四八年九月には完了していたようである。そうして高松ではその年の十二月に出版され、会津若松では翌年の五月に出版されたということになりそうだ。

五

こうして相田氏の新聞連載は、二つの『会津百人一首』と結実したわけだが、石原氏は後に毎夕新聞社から『会津百人一首』が刊行されたことをご存知だったのだろうか。同様に毎夕新聞社は、先に高松で『会津百人一首』が刊行されていたことを知っていたのだろうか。なんとも不思議な話である。
なお、本書をどこで見ることができるのかを調べてみたところ、さすがに会津若松市立会津図書館には二種類とも所蔵されていた。また福島県立図書館には毎夕叢書が二冊所蔵されていることがわかった。今となっては既に希書になっているようである。「八重の桜」の関連として、二つの『会津百人一首』に川崎尚之助と八重が撰入していることを報告しておきたい。

（注）「毎夕新聞」は一九四七年五月に「会津毎夕新聞」として会津若松で創刊され、一九六九年一月一日から「毎夕新聞」と改題し、準日刊発行を続けたが、一九九一年九月三十日付で廃刊になった。そのバックナンバーは福島県立図書館に現物保存されているとのことである。